

Title	近世農村における市場経済の展開
Author(s)	植村, 正治
Citation	大阪大学, 1987, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/35795
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【4】

氏名・(本籍)	うえ 植	むら 村	しょう 正	じ 治
学位の種類	経	済	学	博 士
学位記番号	第	7 8 6 9	号	
学位授与の日付	昭和 62 年 9 月 30 日			
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当			
学位論文題目	近世農村における市場経済の展開			
論文審査委員	(主査)			
	教授	原田	敏丸	
	(副査)			
	教授	作道洋太郎	教授	宮本 又郎

論文内容の要旨

近代経済への移行の前提条件の1つに、市場経済が展開していることがあげられるが、本論文においてはこのような視角から、領国体制として質的に異なる2つの地域市場を取上げ、近世農村社会においても市場経済の展開があったことを見た。

まず第I部では播州農村を取上げた。第1章「播州地域の特性と地域的市場圏の広がり」の第1節では、第I部で利用した史料の所蔵家とその所在村落の村況を紹介することを通してこの地域の特性をうかがった。さらに第2節では、この地域が領主統制が相対的に弱い、いわゆる非領国地域であったことを示し、第3節では、市場経済が展開していた地域的市場圏の大きさがどれくらいであったかを見るために、旧地主文書(近藤家)である奉公人請状から労働市場圏、貸借関係証文から金融市場圏の広がりを図示し、その範囲を視覚化した。

第2章「近世農民経済の諸側面」では、市場経済が展開しうる社会経済的、もしくは制度的背景について見た。まず、第1節では播州の加東・加西郡を中心に広がった地域的市場圏において農民達の間で張りめぐらされていた経済的ネットワークがどのようなものであったかを明らかにした。第2節では、近藤家の魚問屋帳合法の分析を通して当時の経済的関係が近代的な合理計算に基づいていたことを示し、さらに、第3節では、そのタイトルに示したように、農民貸訴訟と大名貸訴訟の具体的過程を明らかにした。前者の場合、貸付側の権利が保証されるような制度が整備されており、この制度を背景にして農民的市場経済が展開しえたと考えた。しかし、後者では形式的な制度はあったもののそれは全く機能しておらず、農民的市場経済の限界がそこに見出せる。

第3章では、前掲の近藤家文書と旧大庄屋奥田家文書から明らかになった各種の経済数値を時系列化

した。まず第1節で奥田家文書の年貢米関係史料から各年の豊凶状態指標を時系列化して、それと人口変動との連関を検討した。さらに第2節では近藤家文書の奉公人請状から奉公人賃銀を得ることができるので、その変動状態や賃銀格差の動向を検討した。また、賃銀が需給原理に従って決定されていたことを探るために、第1章第3節で得た奉公人出身地分布を時系列化し、これを労働需要指標と見なして、これと賃銀との相関を見た。また豊凶指標がある程度労働供給状況をあらわす数値であると考えて、これと賃銀との連関を検討したところ、いずれも統計的な意味が見出され、労働力が市場メカニズムを通して配分されていたことが明らかになった。

第3節の「小作料」では、市場メカニズムの作用を直接あらわす数値は得ることができなかったが、その長期的趨勢の検出過程で、修正を加えた反当り作徳米の短期変動時系列が、貸付資金の需要動向を示す時系列であることが明らかになった。最後の第4節においては、近藤家に残る千数百通の金融関係証文から得た各種の利率を時系列化し、奉公人賃銀と同様に、利率変動の需給要因を検討した。まず、年々の需要指標として金融関係証文に記された貸付金額時系列（投資資金需要に近いものと想定した）と、さらに第3節で得た反当り作徳米の短期変動時系列を取上げ、これらと利率との連関を検討して有意な連関を見出した。供給サイドとして幕府貨幣財政支出額を取上げて検討したところ、明瞭な連関が見出せた。第4節の最後に、利率の規定要因の1つである領主規制を取上げ、近藤家がこのような規制に対応するために、貸付形態の変更や、貨幣貸付と実物貸付との代替を行っていたことを、数量データを利用して明らかにした。

第Ⅱ部では讃岐農村を取上げ、第Ⅰ部と同様の観点から生産要素のもう1つである農地価格変動を分析した。第4章第1節では、4・5章を通して主に利用した史料の所蔵家、丸岡家（旧庄屋）とその所在村落である岡村の村況を紹介し、第2節では、高松藩の領国的性格を明らかにした。第3節では岡村を中心とする地域的市場圏の広がりを視覚化したが、史料的制約のために農民移動史料を用いて間接的にその広がりを図示した。

第5章では、丸岡家史料（高松藩領）から明らかになる農地価格と米価・利率との関連について見、それらに明瞭な連関が見出せ、農地が市場メカニズムを通して配分されていたことが明らかになった。第6章では、第5章と同様の観点から丸亀藩領農村における農地価格時系列を考察し、その時系列と米価との連関、および、利率の代理指標とした藩札流通・人口との連関を探り、高松藩領と同様に市場経済の展開があったことを示した。

近世社会においては市場メカニズムが作動するための制度的前提条件が未成熟で、生産と分配が市場経済に依存する程度は相対的に低く、それらは他のシステムにも基づいて行われているが、本論文では、そのような前近代経済とくに封建農村経済においても、市場メカニズムを通して諸財貨の生産や分配がなされていたことに注目して種々の価格データ（とくに賃銀、利率、農地価格）を時系列化し、近代社会とは異なった形ではあるが、このようなシステムの展開があったことを明らかにした。

論文の審査結果の要旨

本論文の内容上の特色は、わが国近世の封建社会における農民の経済活動が従来考えてきたよりもはるかに高い程度で市場経済に依存していたことを主張している点にある。わが国近世の社会経済の特質を再検討する上で、本論文の成果は逸することのできない重要なものとなろう。

研究方法としては主として文献の記述に依存した伝統的な経済史学に数量史的研究方法を導入して近世経済史の新しい取組み方を試みている点にその特色がある。とくに地方農村に残存していながら従来あまり利用されなかった史料を大量に活用して、数量史分析の俎上にのせることができるよう各種経済指標の長期時系列を作成し、それら各種経済指標相互の連関を検証することによって近世農村経済の性格を究明しようとしたことは本論文のすぐれた独創であり、近世農村経済史研究に新たな地平を切り拓いたものとして高く評価される。概念の整備や論文構成の面で今後の研究にまつべきところもいくらか残されているが、数々の新しい知見と方法上の独創性を有する本論文は近世経済史の分野で高い評価を与えられるべき業績であり、経済学博士の学位に十分値するものと判定する。